氏　　名	王　　勇
学位（専攻分野）	博士(学術)
学位記番号	総研大乙第18号
学位授与の日付	平成８年９月３０日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位論文題目	聖徳太子と中国文化－歴史を動かした慧思後身説
論文審査委員	主　査　教　授　千田 稔
	教　授　井波 律子
	教　授　山折 哲雄
	教　授　薗田　香融（関西大学）
	教　授　石上　善應（大正大学）

論文内容の要旨

本論文は序章および５つの章より構成している。

序章「文化交流史の視点」は主として方法論を述べる。「逆輸入」を例として、中日関係史における日本学界に主導的な役割を果たし続けてきた「受け身」の歴史観を批判して、「相互に影響を与え合う」という文化交流のもつ本来の意味を強調し、従来より看過されがちの日本文化の輸出を正面から取り上げるべきことを指摘した。つぎに、歴史研究における実像と虚像の問題を論じ、近代史学から切り落とされた伝説などのもつ歴史的意味を積極的に評価した。つまり、虚像は各時代・各地域の人々によって自由に作り替えられるからこそ、時空を超越して歴史の展開に影響を及ぼすことができる。

本文は右の歴史観に基づき、中日両国の文献にみられる「聖徳太子の慧思後身説」の発生・変容および影響を、東アジア文化圏を視野に考察し、隋唐時代における中日文化の相互伝播の様相を明らかにしようとした。

第一章「隠された使命」では、藤原清河を大使とする第十二次遣唐使に与えられた使命を探る。従来、藤原清河による鑑真の招請はよく知られるが、文人蕭穎士を招いたのは日本使か新羅使かについては定説がない。本章では唐代の文献を利用して、藤原清河らの玄宗謁見は通説のように７５３年「正月」ではなく、同年の３月であったことを立証した。これはちょうど蕭穎士招請の時期とほぼ一致するから、日本招請説を有力にした。この考証作業の狙いは、蕭穎士が病気を口実に渡日を断ったのに対して、鑑真はなぜ６回目の密出国を強行したのか、という疑問を浮かび上がらせるためである。

第二章「鑑真渡日の動機」では、前章の疑問を承けて、鑑真が異常なほどに渡日に執着した理由を考察する。『唐大和上東征伝』によれば、栄叡らに渡日を請われたとき、鑑真は高僧慧思が倭国王子に生まれ変わった説話を引いて、その招請に応じたとある。しかし、日本で右の話は思託の作為とする意見が一般化している。本章では「慧思の倭国転生説」と「太子の慧思後身説」とを分けて考え、中国における慧思転生説話の源流をたどり、鑑真渡日前に倭国転生説が既にあった確証を銭唐館碑文（７１８年）に求め、この説話が唐代でかなり流布していた史料を敦煌写経（７６６年）に得た。さらに、慧思は天台宗の遠祖と崇められるから、鑑真が渡日前に天台山を参拝したこと、天台章疏を日本に招来したこと、揚州の龍興寺に慧思信仰があったことなども鑑真の渡日動機を示唆する傍証となる。

第三章「聖徳太子の慧思後身説」では「慧思の倭国転生説」から「太子の慧思後身説」への変遷、つまり「倭国王子」は何時どうして「聖徳太子」に結び付けられたのかを追求する。慧思の後身を追って来日した鑑真らは、奈良朝の篤い太子信仰に接するや、聖徳太子こそ「慧思の生まれ変わった倭国王子」との信念を強くしたと推察する。その裏付けとして、鑑真に随行した弟子思託と法進の著作『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』『延暦僧録』（以上は思託撰）『註梵網経』を精査し、そこに慧思と太子の信仰習合の原初的形態を見い出したのである。即ち、鑑真僧団の渡日によって、奈良時代の太子信仰は大きく変わり、慧思信仰との習合した形で流布し始めた。

第四章「上宮疏の中国への流布」では、聖徳太子の三経義疏の送唐および唐僧明空の『勝鬘経疏義私鈔』の伝来を取り上げる。三経義疏は成立してまもなく朝鮮や中国に伝えられ、入唐僧誠明らが揚州にもたらした『勝鬘経義疏』を読んだ明空は、それに注釈をつけて『勝鬘経疏義私鈔』を成した。この書は早くも中国で散逸したが、円仁の持ち帰った写本は長く比叡山に珍蔵され、平安末期から山外に流出して、四天王寺や法隆寺などで盛んに書写された。本章では三経義疏の送唐や明空の注釈および『勝鬘経疏義私鈔』の伝来と書写など一連の事件がすべて聖徳太子の慧思後身信仰によって有機的に結び付けられていることを、実証的に論考した。また、西教寺に現存する最古の写本を調査し、新たに発見した跋文六条をはじめて学界に紹介した。

第五章「伝教大師と慧思後身信仰」は、「聖徳太子の慧思後身信仰」が最澄の日本天台宗開創に大きな役割を演じたことを論じる。最澄の入唐目的について、従来それを論じる人は少ない。平安京に遷都した桓武天皇は南都旧佛教に対抗できる新しいイデオロギーを必要とする。８０２年に和気氏主催の高雄天台会を通じて、桓武天皇は「天台教迹、特に諸宗を超へ、南岳（慧思）の後身、聖徳に垂迹するを見て知れば、即ち霊山の高迹を興隆し、天台の妙悟を建立せん」と発願し、最澄を唐に派遣した目的は聖徳太子の前身なる慧思の遺教としての天台宗の将来に違いない。この推論は安殿親王の最澄に託した「金字法華三部経」の送唐や最澄の天台山における「聖徳太子の慧思後身説」の宣揚などによっても裏付けられる。最澄は『註金剛錍論序』で、聖徳太子と鑑真和上に頼って天台宗を創立したと述べ、鑑真と慧思信仰の関わりを示唆している。

以上の五章はいずれも序章に示された歴史観に立脚し、時空を超越する「転生説話」が主人公の慧思と太子をして時代と民族を超えて、より大きな舞台（東アジア文化圏）に生まれ変わらせ、中日両国の文化交流を大いに促進した「歴史的事実」を究明しようとした。

（論文審査結果）

本論文は、聖徳太子の伝承が日本列島、朝鮮半島、中国大陸を含む古代の「漢訳仏教圏」において多様な展開をみせ、それが鑑真や最澄など日中のあいだを従来した知識人の思想と生活に衝撃的で想像力豊かな影響を与えたことを、斬新な方法と新発掘の資料にもとづいて究明した画期的な研究である。

従来の日中交流史の研究は、歴史学、仏教学の分野を含めて中国からの受容という側面のみを重視する「模倣文化」論、すなわち一方通行的な歴史観が支配的であった。また、聖徳太子という人物の思想と行動を論ずる場合でも、もっぱらその「実像」を、乏しい史・資料によって探索する閉鎖的な研究に終始し、さきの「漢訳仏教圏」の中で拡大していった伝承群、すなわち聖徳太子の「虚像」についてはほとんど視野に入れず、むしろ否定的に扱う傾向をもっていた。著者は以上にのべた二つの研究上の偏向を是正するために、日中の文献とくに聖徳太子の著作とその伝承にかんする中国側の文献を精査することで、それらの太子伝承が現実の日中交流史の中ではたした創造的な役割について実り豊かな議論を展開している。

第一章「隠された使命」は、天平勝宝二年（七五〇）におこなわれた第十二次遣唐使の重要な使命の一つが、鑑真をはじめとする唐の人材を招請することにあったことを、従来の研究の上に立って着実に論証している。

第二章「鑑真渡日の動機」では、右の第一章で明らかにされた日中の国際関係を背景にして、著者独自の考察が展開する。鑑真は日本に戒律を伝えた律宗の開祖として知られるが、かれの渡日の真の動機は、中国天台宗の祖とされる南岳慧思の予言、すなわち死後倭国の王子に転生して仏法を興隆しようと誓った言葉に、刺激されてのことであったとする。

第三章「聖徳太子の後身説」は、第二章で明らかにされた慧思の「倭国再誕」の予言が、日本における聖徳太子信仰と結びつけられ、太子が南岳慧思の生まれ変わりであるとする伝承が生み出されていった過程を明らかにする。そして、そのような伝承をつくりだす上で鑑真とその弟子達（法進、思託）が大きな役割をはたしたことを論じている。

第四章「上宮疏の中国への流布」は、聖徳太子の著作とされる三経義疏が中国へ輸出された事実、そしてまた唐の明空がそのうちの「勝鬘経義疏」に注釈してつくった「勝鬘経義疏私鈔」がわが国に伝えられた問題をとりあげ、詳細に論じている。これは上にふれた「漢訳仏教圏」における思想交流を示す典型例をなすものであるが、とりわけこの明空の「私鈔」の成立の経緯を論じ、日本に現存するこの注釈書の諸本の書誌的考察を試みているところがもっとも力の入った部分であり、本論文の白眉をなしている。

第五章「伝教大師と慧思後身信仰」では、最澄が入唐したのは鑑真の請来による天台教学にふれたこととともに、聖徳太子の慧思後身信仰にうながされてのことであったいきさつが論じられている。こうして最澄は、聖徳太子と鑑真を天台宗の遠近二祖と仰いで、日本天台宗開創の思想的根拠としたのだという。さきの南岳慧思と天台智顗をつなぐ中国の信仰の流れと、その慧思と聖徳太子をつなぐ日本の信仰の流れの二つを明確な形で関連づけたのが最澄であるとしている。

以上、本論文は日中の漢字文化圏を視野に収めた雄大な構想のもとに、聖徳太子の著作と太子にまつわる興味ある伝承群を精査し、「聖徳太子の慧思後身説」なるフィクション（虚像）が両国の歴史と思想界に与えたダイナミックな作用を実証的に浮き彫りにしたものであり、その努力は高く評価される。なお、本論文が中国の学究の手になるものであり、明晰かつ流麗な日本語で書き綴られていることも特筆大書すべきことといわなければならない。よって、本論文は博士論文に十分に値するものであると判定する。